

令和5年度「令和における福生市立学校の在り方検討委員会」（第3回）感想等

1 今後の不登校児童・生徒の支援のための学校の在り方について

委員	まず、不登校にいたらないように、学校での生活に安心感をもてるようにする。登校できない理由は、児童・生徒によって異なるため、丁寧に聞き取っていく必要がある。SCやSSWとも連携し、登校支援を行っていく。教室に行けない児童に対応する、人材や場所が必要である。対応する人や場所があることで、学校に来られる状況をなるべくつくり出す。
委員	不登校児童は、年々増加傾向にある。学校生活にスムーズに入れず入学児童や年度途中からの不登校傾向が目立つようになってきた。また、特に、印象的なのは、保護者がしっかり子どもに寄り添っている状態が多く見受けられるということである。学校に一度来ると、普通に学校生活を送っている様子も多い。一方で、家庭の生活リズムの乱れやゲームに夢中、家庭と学校の様子が違うなど二面性もよく聞く。今後は、表面的なことでは判断が難しい事案が多くなると予想される。心理士やSC、SSWなどの専門的な機関・担当としっかり連携していくことはとても重要なことだと感じる。
委員	不登校の原因は多岐にわたり、対応策も決め手となるようなものはないが、少なくとも学校においては、学級での居心地の良さを高めていくことが最も重要であるとして、未然防止に努めている。取組としてはアセス(学校環境適応感尺度)を実施し、年2回、第2学年以上の全児童を対象にアンケートを行い、個々の児童が抱える個別の課題に担当がいち早く気付けるようにしている。家庭の問題に起因する不登校に関しては、関係諸機関との連携が重要なのはこれまでと変わらないが、家庭の問題や支援に入り込むことを考えると子ども家庭支援センター等を主体とした動きが必要なのではないかと思う。
委員	小学校段階での登校しぶりや不登校への対応では、まず、「未然防止に努めること」、「新規不登校児童を作らないこと」、「初期対応を万全に行うこと」、「早期解決を目指すこと」等、が重要である。そのためにも、常に情報共有に努め、組織的・計画的に取り組めるよう校内体制を整えるようにしていきたい。不登校児童の支援では、学校だけではなく、保護者や地域との連携も重要である。本校では、PTAやCS委員会の皆さんが、豊かな学びにつながる体験活動等、子どもたちにとって魅力的なイベントを実施してくださっているので、不登校児童の参加につながっている。
委員	不登校になった児童・生徒に多様な学びの場をつくることは大切だと思うが、何をどこまで行っていくかについて考えることが必要だと思います。問9で、勉強を続けたいと思っていない生徒が55.5%と半数以上、問31の不登校であったことがマイナスに影響していると感じていない生徒が40.3%いる結果となっています。これは、勉強できなくても、学校へ行っていない自分も困っていないと思われているのではないのでしょうか。そういった、児童・生徒にどのような場をつくっても登校が難しいことも考えられます。学校の在り方としては、まずは不登校の未然防止、不登校にならない学校づくりに力を入れなければならないと感じます。
委員	不登校は問題行動ではないが、解決すべき学校の課題となっているという矛盾は一度置いておき、子どもの居場所として学校があるのであれば、その子に関わり続けることが大切であると考えます。子ども自身が自分の居場所を見付けようとするきっかけは、学校が能動的に発信し続けなければならない。
委員	学校は教科の学習だけでなく、自分の話をしたり思いを語ったりすることのできる場所・時間・相手になり得るものだと思います。不登校の背景は様々ですが、これまでの保健室登校のようなワンクッションとなる場所(部屋・教室)や大人の存在が必要だと考えます。現在、それを必要とする(常にはなくて一時的、単発的でも)子どもは多いと感じます。SCの配置も現在週に1日ですが、学校に常駐(少なくとも週3日とか)となれば、継続的な支援にもつなげられると思います。
委員	不登校児童・生徒に対しては、COCOLOプランの「つながりイメージ」図にあるように、学校もしくは外部機関の大人が直接的につながることを目指し、継続する。今後、新たな不登校生徒を生まない取組について、学校区ごとに小・中学校が連携し検討を進めることができればと考える。
委員	事務局からの説明にあったとおり、近年の不登校児童・生徒については、そうした要因が多様化している傾向にある。不登校対応をしている際に感じることは、ほとんどの不登校生徒の保護者は、我が子の対応に悩んでいるということである。本市における、そよかせ教室や、一中7組等も含めたアプローチを全教員ができるようにしていきたい。
委員	不登校の実態は様々であるため、支援の方法も変わってくる。本校においても生徒が軽度であるなら、キーパーソンとなる教員が目標を本人と確認し、挑戦させ、徐々に登校へと促している。また、会話を重視し、その中で共感し期待し続ける姿勢を示す。また、本人と会話ができるに越したことはないが、教員が不安を受け止め、無理せず寄り添うことを心掛けている。現在本校においては、生徒が「今、どの状態・どの時期」にあるか理解することが良い支援の第一歩であると捉え、そこから実践したいと考えている。
委員	不登校の児童・生徒に対しては、原因がそれぞれに異なるので、一人一人と向き合っていくことが大切だと感じました。コロナ禍での環境などもあり、不登校の理解が広がったため無理に学校に行かせない保護者が増えているのではとも言われています。未然に防止するために学校と保護者間でコミュニケーションを取り、児童・生徒の前兆のサインに気付き対応していくことが大事だと思います。不登校に対しての環境やハード面で整備が進んできている中で、保護者として家庭の中でしっかりと子どもと向き合っており、ふれあいの場をつくっていくことが未然防止につながると感じました。
委員	“昭和の時代”は特定の子が怠けていると思われた「学校ごらい」、「登校拒否」があり、「校内暴力」その後「体罰」、「いじめ」は今でも社会問題となっている。「不登校は問題行動ではない」との認識が定着するなかで、不登校の根底には児童・生徒が学校や社会のしんどさ、言い換えれば生きづらさを感じていると思える。不登校の子ども一人一人をケアするには対処療法でしかなく、根本は学校だけの問題でなく社会全体の課題として取り組むことが求められる。従来から学校は集団生活を経験するのに必要な校則や時間割を守ってきたが、その仕組みに合わない児童・生徒に通いたいと思えるその子どもに合った“居場所”があることが登校のきっかけになる。何とか義務教育を終え、その後の社会的自立ができる力が備わるように中学校までの学校以外の受け皿を見直して児童・生徒が成長していくことを願いたい。その後、不登校の子どもがそのまま、ひきこもりやニートになるケースは少ないと言われている。個人情報保護から家庭の状況まで踏み込まず、不登校の原因をつかみ改善することが、なかなか進まない。不登校の子どもとその家族を孤立させない学校でありたい。
委員	不登校の原因は多種多様で、解決方法もなかなか見つかりません。インターネット等で学力は維持できるものの、コミュニケーションが取れずひきこもりになる心配もあります。7組を充実し、それぞれに合った時間割、ペースで学習することが望ましいと考えます。
委員	不登校特例校から「学びの多様化学校」に名称が変更になった意味合いも自分なりに理解できたと思います。誰一人取り残されない学びの保障という、この「取り残さない」となれば地域・学校の姿勢が垣間見えます。「取り残されない」というこの表現は何としても一人一人に光をあてて、まなざしを送る保障を感じます。その意味で今回、時間を作って不登校児童・生徒の支援について意見交換できた点に感謝します。
委員	学校でのコミュニティ・スクールの関わりがますます高まっていることを、再確認したい。市民の方々と「地域で子どもを育てる」意識を共有できる社会を実現していきたいと思えます。
委員	「不登校といっても原因は一人一人様々で複雑」とのこと教育機会確保法により、多様化する子どものニーズへの対応ができるのが、とても良いと思いました。そして、義務教育修了後についても継続した支援があることはとても大切であり、ありがたいことだと思います。
委員	不登校生徒が年々増加傾向にあることが分かりました。私の立場としてできることは、地域での見守り、登校のお手伝いなど生徒だけでなく保護者の方の話や話を聞くなど支援ができるのではと思いました。

2 部活動の地域連携・地域移行に関する方向性について

委員	様々な課題が山積する中、教員の負担は大きく、また、ライフワークバランスの点からも、地域連携・地域移行が進められるべきである。一方で、スポーツや文化的な活動を通して育まれる力もあるため、生徒の活動を保障することも大切である。福生市として、中学校を超えて活動ができる体制（指導者・場所）が構築できるとよいと考える。
委員	小学校の立場で、中学校の部活動を語るのには、見えていない面も多いので、参考としての考えを述べたい。 働き方改革や部活動顧問の先生方の個々の考え、専門性の有無、自己の部活動体験など一律ではなく、共通項をくくるのは難しいため、改善・解決策等の方向性を定めるのは難しいと感じる。しかし、地域連携・地域人材の専門性は導入できるところから、着実に浸透させていくことが重要である。安全面、指導力の現状を受け入れながら、部活動の在り方を検討し、場合によっては、専門性を期待する生徒・家庭に対しては、学校だけではなく、地元等のクラブチームや団体に委ねてもよいのではないかと感じる。しっかり時間をかけ、関係者の意見を吸い上げながら、検討することが良いと感じる。
委員	教員のライフワークバランスや指導の専門性を考えると自然の流れなのかなとも思う。責任の所在など体系的な整備や適切な人材の確保、教員の本務なのかどうかの意識改革は早急に整える必要があると感じた。
委員	今回の講演を拝聴して、国や東京都が取り組んでいる部活動の地域連携と地域移行について、理解を深めることができた。 部活動改革は、「教員の勤務負担軽減」、「少子化による生徒数の減少」、「専門的な技術指導ができる指導者の確保」等の背景により、必要不可欠な改革である。その一方、「子どもたちのために」という視点は、忘れてはならない。先行して取り組んでいる実証事業の成果と課題を踏まえ、福生市の実情に応じた部活動改革が進められていくことを願っている。
委員	部活動の地域連携は一つの考え方で良いとは思いますが。その際、学校とどのような関係をつくっていくことが必要かをしっかり押さえておくべきだと思います。例えば、けがや事故の責任の所在を明確にするなど様々なことを決めておく必要があると思います。
委員	働き方改革を進めるには、現状の取り組み方を変更させていかなければならないと思うが、一方で今の形の良さをどのように活かしていくかは課題になると考える。ただ少しでも前進するためには、まずは地域連携から始めるのが良いのではないかと。
委員	生徒においても教員においても部活動に対する思い入れが多種多様で温度差がある中で、部活動の継続・存続について新しい道を考えねばならないことが伺えました。地域連携でも地域移行でも、部活動指導を年間を通じて続けていける方をお願いするとなれば、単にボランティアの域は超えているものと思います。 中学生の時期に、自分が打ち込む何かを見付け、そこでともに切磋琢磨した仲間がいることは、とても重要で意義深い事ですが、個別最適な学びや自由選択の発想や現代の働き方改革の考え方からすると、今までの部活動の在り方の全てを充足させることは難しいと感じました。（大会や活動人数等についても） 例えば、公民館や体育館等とコラボレーションすることはできないでしょうか。
委員	学校の在り方検討委員会や連絡会等の意見を基に、市全体としての方向性、アウトラインを決め、休日の部活動移行など可能な所から順次進める。教員は、部活動指導を行いたい教員とそうでない教員双方の意思を尊重し、指導を行いたい教員に対しての環境整備を進めていく。
委員	早急に計画を立てていくべき事業と考える。土日に部活をしている教員と、していない教員の時間外労働時間は桁違いであることから、土日の勤務だけでも早めに対応を打ち出したい。
委員	令和3・4年度に東京都中学校体育連盟の役員として定期的に会議に参加したが、最近は総合的にみて、指導者の問題等思っていた以上に簡単でないと感じる。しかし、福生は3校の野球部が合同チーム（「オール福生」でこの秋、都大会出場を果たした。）であり、また、本校においては、バドミントン部がバトミントン連盟とすでに連携し活動している。今後、福生のコンパクトシティの利点を生かした突破口があるように思う。
委員	先生・教員の働き方改革や人員の不足等の中で地域との協力関係を創っていくことは重要なことと思います。地域や民間の団体やクラブは利益や実績重視となり易く、部活動の中で重要な楽しむことや仲間意識、教育活動等が軽視されることがないように進めて欲しい。 先生と生徒の関係が授業だけのつながりで、希薄になることの無いような対策も必要なのではないでしょうか。
委員	地域連携・移行を具体化する中で生徒の安全に対する配慮を大切にしてください。形態は教育委員会の中に専門部署を設けコーディネーターを置き、運動部、文化部の両面から関係団体と連携を進める形が良い。部活動の目的で「友達と楽しく活動するため」と回答した生徒が35%おり、体力・技術の向上、大会等での良い成績の目的よりも多い。部活動を完全連携・移行するのではなく、土日活動なし・大会に参加しない・教員の負担が少ない愛好的な部活動は残しても良いのではないかと。
委員	教員アンケートで部活動指導を負担と感じている教員が77%もおられることを知り、今後の部活動の在り方の難しさを思い知りました。専門ではない教員が顧問として担当するケースも多く、地域移行は避けられないと思います。すぐに解決できる方策はないと思いますので、まずはクラブチームの監督や管理者にオブザーバーで検討委員会に来てもらい、メリット等の意見を聞いてみるのはいかがでしょうか。
委員	地域クラブの運営方針と教育現場のベクトル合わせがうまくいくのか、議論を通して心配です。先生方の負担軽減等も大事ですが、専門的技術だけを追い求め吹奏楽やスポーツの成績至上主義に陥らないでしょうか。中学校の部活動はそんなに都大会、全国大会に出場することが必須条件なのではないでしょうか。 集団行動、団結力を含めて成績に現れない教育意識が地域クラブに必要な十分条件として備わっているのか見えてきません。「教師は最高の教育環境である」と、ある教育学者が言われました。この教師を地域クラブと置き換えられるか、私自身、この段階で答えを持ち合わせておりません。
委員	目指す方向に違いはないが、ハラスメント防止の方策を模索する必要があると考えます。
委員	今まで教員の方々はとても頑張ってくださいっていただきました。本当に長時間労働であったと思います。地域連携・地域移行でよろしいかと考えます。
委員	部活動の地域連携・地域移行については、先生方の負担が少なくなることは良いことだと思いました。